『源氏物語』の言葉と文体

鈴木　日出男

一　紫の上の「うつくし」、「御法」巻の「あはれ」
二　「夕顔」巻の「あやし」
三　柏木物語の「あはれ」
四　主要な女君たちの「憂し」と「人笑へ」

『源氏物語』には、たとえば同一の人物や同類の人物群に特定の言葉が一貫して用いられたり、また作品の任意部分に特定の言葉が集中的に多用されたり、というように、ある種の偏った用い方がみられる。そして、その特定の語が、その語本来の基本的な語感をもとに個々の文脈のなかで一回的な意味を発揮するとともに、逆にまた、同一の語の繰り返しによって物語に有機的な統一性をもたらしてもいる。それは、この物語に特有の特徴的な文体の一つとみられる。
ここでは具体的に、紫の上の「うつくし」、「御法」巻の「あはれ」、「夕顔」巻の「あやし」、柏木物語の「あはれ」、さらに光源氏の主要な女君たちに共通する「憂し」や「人笑へ」などをとりあげながら、その言葉を緊密にひびきあわせる、この物語に特有な文体の機微にふれた。

一

いうまでもなく物語は、言葉によってその想像力を飛翔させ、言葉によって作品の具体化を実現している。そのために、ここでの言葉はとりわけ緊密な脈絡をつくり出そうとする。特に『源氏物語』のような巨大な古典作品であればあるほど、言葉の緊密にひびきあう強固な文体を形成している。その固有の脈絡を形成している言葉の一つ一つを解きほぐそうとする作業が、ほかならぬ作品解釈の第一歩といってよいだろう。

作品形成のための言葉の緊密なひびきあいとは、どういうものか。たとえば、作中人物の造型方法の一つとして、ある人物に、ある特定の語が繰り返し用いられ、その語がその人物の特徴になるというのも、その一例になる。ここでは、紫の上の造型に関わる形容語を一瞥しておこう。この紫の上は、十歳の少女として「若紫」巻に登場して源氏に垣間見られて以来、四十三歳で死を迎える「御法」巻にいたるまで、一貫して「うつくし」「らうたし」の語によって語られている。「御法」巻では、死の直前の容姿を「限りなくらうたげ」[1]（五〇四頁）と語り、その死顔を「つやつやとうつくしげ」（五〇九頁）と絶賛している。周知のように古語一般としては、「うつくし」を「かわいい」、「らうたし」を「可憐だ」ぐらいに解するのが普通であろうが、そのような現代語訳だけでは右の最晩年の紫の上の美質をとうてい理解することができない。だいいち、初老の婦人をかわいいとか、可憐だとかいうのは不自然である。これは、原典の現代語訳、ひいては外国語への翻訳の問題とも関わっていよう。この場合、何よりも、物語が紫の上に「うつくし」「らうたし」の語を一貫して用いている必然性をおさえるところから、逆にその文脈上の一回的な意味を導かねばならないであろう。

また、ある語が作品のある部分に集中して用いられるというのも、この物語の文体の特徴の一つとして考えられる。その一例として、「あはれ」の語の集中する「御法」巻の場合をとりあげてみよう。冒頭近く、死期の近きを直感する紫の上は、多年にわたる源氏との縁を絶つとなれば彼をどんなに悲嘆させることになるかを想像して、「御心の中にもものあはれに」（四九三頁）思う、とある。また、法華経千部供養の豪華な法会のなかにありながらも、「残りすくなしと身を思したる御心の中には、よろづのことあはれ」（四九八頁）だと思う。その翌朝、近づく自らの死を「まづ我独り行く方知らずなりなむ」と思い、「いみじうあはれ」（四九九頁）と思わずにはいられない。また、源氏と明石中宮に見舞われる場面では、いよいよ最期の時だ

と思う気持から、「あはれ」と感ずるところから、「おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩の上露」（五〇五頁）の歌を詠みかけてしまう。

「御法」巻に多用される「あはれ」の語の数々は、死を迎えようとする紫の上の多様な感動を表そうとしている。文脈それぞれのなかでは、情愛、執着、法悦、悲嘆、絶望などと、さまざまの感情が区別されているが、しかしそれらが「あはれ」の一語によって統一されるところから、死に向かう紫の上の物語を、有機的で統一ある脈絡として跡づけることができている。多用される「あはれ」の語が、たがいに照応しあって、固有の脈絡をつくり出しているのである。それは、紫の上の末期の目がとらえる諸事への感懐であるといってもよい。源氏と対するのをはじめとして、さまざまな人間関係も、室内の装飾も外界の光景も、何もかもが悲しくはかなく映じてしまうのである。

右にみてきたように、紫の上の造型には一貫して「うつくし」などの語が用いられたり、また「御法」巻には「あはれ」の語が集中的に用いられたり、というように、しばしばその用法には偏向的な傾向もみられる。われわれ現代人の感覚からすれば、同一語句の繰り返しは悪文の証のようにもみえるが、この場合、けっしてそうではない。繰り返されながらも、その一回一回がたがいに異なるニュアンスを画しているからである。むしろ、繰り返されることによって、かえって一回的な独自性が確保されてもくる。それというのも、その言葉が、基本的な語感をもとに、多様な意味なりニュアンスを発揮するからである。そのように形成される作品をどのように理解するかの問題に即していえば、個々の言葉がそれぞれの文脈のなかでどのような一回性を発揮しているか、あるいは逆に、特定の言葉が同一作品内をどのように貫き通っているか、などの問題として引き出されてくるのである。これは、作品が一回的な文体として成り立っている、その文体のありようを明かすという意味での解釈といってもよいであろう。

二

ここでは具体例の一つとして、「夕顔」巻の、女主人公夕顔の死にいたるまでの話に、「あやし」の語が集中的に多用されている点に注目したい。この話は、周知のように、身分低い者たちの住んでいる京五条の、夕顔の花の咲く宿の女に強い関心を寄せた源氏が、やがて交渉をもちはじめるが女はけっして素性を明かそうとしない、源氏が彼女を荒廃しかけた某の院に連れ出したところ、深夜物の怪に襲われて女がとり殺されてしまった、という経緯になっている。男も女も自らの素姓を明かさないまま女が急死してし

まうというのであるから、これはいかにもサスペンスふうである。

ここで多用される「あやし」の語は、いわゆる多義的な言葉の典型のようにもみられる。しかし原義としては、おやと感じられる異常なものに対して、「あや」と声を発したい気持をいう言葉としての統一性がある。その原義をもとに、特異・不思議・奇怪の意のほかに、身分卑しい、みすぼらしい、粗末だ、などと、その意味は多岐にわたっている。夕顔の女の死にいたるまでの物語に、この「あやし」の語が、約三十箇所の多くに用いられている。そのなかから次に六例を揚げるが、文脈それぞれの異なる意は明らかであろう。

(1)（随身）「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、（源氏）「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

（一三六頁）

(2)女も、いとあやしく心得ぬ心地のみして、（源氏の）御使に人を添え、暁の道をうかがはせ、御あり処見せむと尋ぬれど、そこはかとなくまどはしつつ、さすがにあはれに、見ではえあるまじくこの人の御心に懸けたれば、便なく軽々しきことと思ほし返しわびつつい としばしばおはします。

（一五二頁）

(3)かかる筋は、まめ人の乱るるをりもあるを、いとめやすくしづめたまひて、人の咎めきこゆべきふるまひはしたまはざりつるを、（源氏は）あやしきまで、今朝のほど昼間の隔てもおぼつかなくなど思ひわづらはれたまへば、……

（一五二頁）

(4)……（女の）罪ゆるされてぞ見えける。ごほごほと鳴神よりもおどろおどろしく、踏みとどろかす唐臼の音も枕上とおぼゆる、あな耳かしがましとこれにぞ（源氏は）思さるる。何の響きとも聞き入れたまはず、（源氏は）いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ。

（一五六頁）

(5)内裏（桐壺帝）にいかに求めさせたまふらんを、いづこに尋ぬらんと（源氏は）思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。

（一五六頁）

(6)この男を召して、（源氏）「ここに、いとあやしう、物に襲はれたる人のなやましげなるを、ただ今惟光朝臣

の宿る所にまかりて、急ぎ参るべきよし言へと仰せよ。……

（一六八頁）

(1)は、源氏が小家の多い五条界隈の、夕顔の花の咲く宿をはじめて目にした折の叙述である。前者の「あやしき垣根」とはみすぼらしい垣根、後者の「あやしくうちよろぼひて」はみすぼらしく崩れかかっている軒先のさま。いずれも、身分卑しい者たちの貧相な住まいをさす。随身が、この白い花は卑しい場所に咲く夕顔だ、と言うと、それをはじめて知った源氏は納得しながら、情けない花の運命よ、と応ずる。右の「あやし」は、高貴の人には縁遠い存在であり、情ない花とも思われる夕顔の花と同様に、このあたりの小家がちの環境に対して卑賤なみすぼらさだと思う気持をいっている。

(2)は、源氏がついに夕顔のもとに忍び通うようになったころ。二人は自らの素姓を明かさぬまま逢瀬を繰り返した。女も男の態度を「あやし」と思う。まったく不思議で合点のゆかぬ思いから、使者のあとをつけさせたり、源氏自身の帰りの道筋を探らせたりもするが、まるで正体がつかめない。後続の叙述には「昔ありけん物の変化めきて」ともあり、男が女のもとに夜な夜な現れては夜明けとともに姿をくらますという、あの三輪山神話をも思わせる趣である。この「あやし」は怪異的な不思議さを思う気持である。

(3)は、(2)に直接的連なる叙述で、源氏が夕顔への異様な恋着ぶりを自分ながら「あやし」と顧みている。いましがた女と別れてきたばかりの朝の間も、また間もなく夕方になって逢えるという昼の間も、気が気でなく待ち遠しいというのだから、異様としかいえない耽溺ぶりである。これまで経験したこともないこの恋着を、自ら「あやし」と思うほかない、恋の力の不思議さが自覚されている。

(4)は、中秋の夜、源氏が夕顔の宿で過ごした折のこと。手狭な住まいなので、近隣の生活の物音はもちろん隣人の話し声までが筒抜けに聞こえてくる。高貴な源氏には耳うるさく何の物音かもわからず、異様なかしがましさである。「いとあやしうめざましき音なひ」とは、そのように異様なまでにうるさい物音の意である。しかし女に耽溺する源氏は、右の冒頭に「……罪ゆるされて」とあるように、彼女がなまじこれを恥ずかしがるよりも、かえって女として難がないとも思う。

(5)は、源氏がそのまま夕顔を某の院に連れ出して、自分の人知れぬ異様な行動を顧みる叙述である。今ごろ桐壷帝が心配して、この自分の行方を使者に捜させていることだろう、あるいはまた、六条御息所には夜離れがどんなに恨まれていることだろう、それも無理かからぬ不憫さだ、と思う。そのような自分を自ら「かつはあやしの心や」とす

る。女に溺れながらも一方では、われながら合点のゆかぬ心だ、と思うのである。抑制をきかなくさせる恋の力の不思議さを、この「あやし」の語が言い表している。

(6)は、その某の院で深夜、女がにわかに物の怪に襲われて急死してしまう、その直後源氏が瀧口の男に言った言葉である。この「あやし」は、物の怪に襲われるという無気味な奇怪さをいう。

以上、(1)〜(6)の「あやし」は、その基本的な語感にもとづきながらも、個々の文脈に限定されることによって、身分卑しい、みすぼらしい、不思議だ、奇怪だ、など多様な意味やニュアンスが表されていることがわかる。

「夕顔」巻にこのように「あやし」の語が集中的に用いられている点について、早くから注目したのは幕末期の萩原広道の『源氏物語評釈』であった。周知のように、この『評釈』は、『源氏物語』の文章・文体の独自性に着目しながら作品批評を試みた点において、註釈史上の画期的な業績であった。「夕顔」巻の「あやし」という語のすべてに◎印を付けて「心をつけて味ひ見るべし」としている広道は、このように繰り返される言葉を「語脈」と呼んで、その分析を試みようとする。この「語脈」という術語については、「文脈」とあわせて次のように説明している。

文脈とはつらねもてゆく文章のすぢをいひ、語脈は語のかゝりゆくすぢをいふ。此ノすぢの続きて、事の意を貫き通すこと、人ノ身に脈(スヂ)ありて、体中(ミウチ)を貫き通れるがごとし、又伏線の条理(スヂ)を、脈といひたる所もあれど、そは別事(コトゝ)也。

「語のゝかりゆくすぢ」とは「語脈」ということになるが、作品展開のなかで特定の共通の語がどのように「語脈」として貫き通っているか、それが文体上きわめて重要だということになる。個々の文脈でそれぞれ一回的な意味やニュアンスが異なるという現象にだけ着目するのでは、この問題は見えてこなくなる。ここではむしろ、「あやし」の語の多義性を逆用するかたちで、卑賤、不可思議・怪奇などさまざまな感情を「あやし」の一語でおさえ、それによって統一ある世界を造成しているという点に、何よりも注目しなければならない。

高貴な源氏が、卑賤ゆえに得体の知れぬ生活を目のあたりにするところから、日ごろ身近かな高貴さとは異なる非日常的な世界に接しつつ、やがて未知の階層の女との恋に耽溺していく。源氏がその恋の魅惑の不可思議さを思う一方では、他方の夕顔の女がこの貴人との恋を変化(へんげ)のしわざかとさえ思う。そして、某の院での怪死事件へと続く。一連の「あやし」という語は、そのように漸層的に度合を強めていく物語の経緯を端的に表現している。単に同一の語

彙が繰り返されているというのではなく、むしろ語彙を一回一回多様に変容しながら繰り返すことによって、物語の主題が支えられていく。それというのも、その語がそれじたい意味やニュアンスの変化を遂げながらも、同一語として物語の展開に貫き通っているからである。

三

同一の語が物語の任意部分に集中する例を、もう一つ揚げよう。柏木が女三の宮に多年恋慕しつづけ、ついに密通を犯し、やがて惑乱を強めて死におもむくという物語に、「あはれ」の語が繰り返される例である。その物語は、次のような例文ではじまる。

(1)（柏木自身が）思ふこととも聞こえ知らせば、（宮が）一行（ひとくだり）の御返りなどもや見せたまふ、（宮が）あはれとや思し知るとぞ思ひける。（若菜下・二二二頁）

(2)（宮が）わななきたまふさま、水のやうにあせも流れて、ものもおぼえたまはぬ気色、いとあはれにらうたげなり。（同・二二四頁）

(3)（柏木の宮への言葉）「……いと心憂くて、なかなかひたぶるなる心もこそつきはべれ。あはれとだにのたまはせば、それをうけたまはりてまかでなむ」……（同・二二五頁）

(1)は、密通直前の柏木の想像で、こちらの多年いだきつづけてきた心の底を訴えたなら、相手の宮も「あはれ」と感動してくれるだろうか、としている。(2)はついに密通におよんだ、そのさなか。はじめて目のあたりにした女三の宮の動転するさまが、「あはれにらうたげ」にうつる。(3)も同じく密通のさなか、柏木が宮に哀訴する言葉である。宮が自分に対して、せめて「あはれ」と共感して言葉をかけてくれというのである。この「あはれとだにのたまはせば」は、柏木の宮に対する決まり文句として、後続の叙述に繰り返される点が注目される。

この「あはれ」の語も、その用いられ方がきわめて多義的である。多様な文脈のなかで、情愛、感嘆、共感、憐憫、悲傷など、さまざまな意で用いられる。しかし基本的な語感としては、しみじみとした気持、人の心を揺るがす感動、ぐらの語感として共通している。もともと「あ・はれ」の語構成によるとする考え方もあるように、心の底から発せられる感嘆の声とみてよいのであろう。

柏木の物語に多用される「あはれ」の語も、右のような基本的な語感をもとに個別的な文脈のなかで多様の具体的な感情を区別し、しかもその同一の語によって物語の主題を統一づけていることは、いうまでもない。さらに、この場合の「あはれ」の語には、次の和歌がふまえられている。

単なる引歌以上に、これが物語の発想と表現を積極的に支えている。

あはれともいふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな　（拾遺・恋五　藤原伊尹）

相手の女から顧みられない恨みを詠んだ歌である。男は女に、「あはれ」と共感の情をかけてほしいと願うが、それさえ叶わぬと見てとって、「身のいたづら」を思う。「身のいたづら」とは無駄な死を意味し、特に恋歌では、悲しんでくれる相手もなく自分ひとりだけが相手に一方的に恋こがれて無為に死ぬことをいうのである。一方では「あはれ」を繰り返し訴えつづける柏木は、他方ではそれの叶わぬための「身のいたづら」を思う。この伊尹の「あはれとも……」の歌が、彼の心情の動きの根拠にさえなっている趣である。「あはれ」の単なる繰り返しではなく、引歌を含んでのそれである。[2]

やがて二人の密通が源氏の知るところとなり、それと知った柏木は懊悩のあまり病床の人となった。「柏木」巻は、そうした柏木の、自分の前途には死以外にないことを思う長大な心内語で開始される。その一節である。

(4)かく人にもすこしうち偲ばれぬべきほどにて、なげのあはれともかけたまふ人あらむをこそは、一つ思ひに燃えぬるしるしにはせめ、……よろづのこと、いまはのとぢめには、みな消えぬべきわざなり、また異ざまの過ちしなければ、年ごろもののをりふしごとには、まつはしならひたまひにし方のあはれも出で来なん、……　（柏木・二九〇頁）

この一読きの心内語では、自分が強いて生き長らえたとしても、密通の噂が広まって自滅するほかないだろう、と考えることろから、むしろ今こそ自らの内に死を招き入れようとする。右の引用にしたがえば、今現在死を迎えるのならば、「なげのあはれ」をもかけてくれそうな女三の宮への恋に殉ずることもできるし、また、自分を無礼な者と思っている源氏もやがては許してくれるにちがいなく、年来の「あはれ」も回復させることもできるだろう、と考えている。ここでは、死を前提にその絶好の時機を選んでいるかのような趣でもあるが、注意すべきは、女三の宮との関係も源氏との関係も同じく「あはれ」として考えられている点である。二人との関係を同質のもののように、ともに「あはれ」と受けとめるところに、柏木の甘えとしかいいようもない心がある。それだけに、このあたりの「あはれ」には、現世的なるものに執着せざるをえない愛憐の情があふれている。現世への断念を通して来世への救済を願う道心などとは、まさに対極的な心のありようである。

柏木の死が迫ってくるにしたがって、こうした愛憐の情

はつのる一方である。二人の間に最期の贈答歌がとり交されるに及んで、次のような柏木の「あはれ」が繰り返される。

(5)（柏木）「……あはれとだにのたまはせよ。人よりならぬ闇にまどはむ道の光にもしはべらむ」と聞こえたまふ。（柏木・二九一頁）

(6)（女三の宮の返歌を、柏木は）あはれにかたじけなしと思ふ。（同・二九六頁）

(7)（柏木）「……夕はわきてながめさせたまへ。咎めきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」など書き乱りて、……（同・二九七頁）

(5)は、柏木からの贈歌に書き添えられた言葉。「あはれとだにのたまはせよ」は、密会以来繰り返された、共感を求めようとする言葉である。そして「闇にまどはむ」は、死後の救われがたい迷妄、仏教的には無明長夜の闇である。ここでの柏木は、女三の宮との共感こそがその煩悩の闇からの救済になりうると考えているが、しかしこれは前記したように、仏教的な救済とはほど遠い絶望的な迷妄であるにほかならない。

(6)は、柏木が内心期待できないとも思っていた女三の宮の返歌を得ての、彼のうれしい感動を語っている。彼女と共感しえたという感動である。

(7)は、女三の宮の返歌に、さらに返歌を詠んだ柏木の添え書である。はじめにある「夕」は、歌言葉として、恋人を思う時間帯をさす。夕刻になったら自分を思い起こしてほしいというのは、逢瀬以来繰り返されてきた「あはれとだにのたまはせよ」と同じ発想である。ここでもそれを繰り返している。自が死んでしまったのでは「あはれ」もいかに「かひなき」ものでしかないことを知っていながらも、「あはれをだにも絶えず」かけてくれと哀訴する。矛盾を矛盾と知りつつも訴えずにはいられないところに、柏木の絶望的な愛憐の情念がある。物語は柏木という人物を、むしろ、彼自身の意識を超えて、人間の恐るべき業として語ってしまっている。

物語はここでも、同一の語をさまざまに用いながらも、それでいて同じ語であるところから物語の展開を統一的に秩序づけている。それによって物語は、柏木と女三の宮のきわめて独自な関係をつくりあげているのである。

四

最後にもう一つ、やはり長編物語としての根幹に関わっている、とみられる例にふれておきたい。その生涯にわたって光源氏と深く関わりつづける女君たちが、おおむね、

源氏との関係を「憂し」（「心憂し」をも含む）と受けとめているのに対して、その類義語ともみられる「つらし」の語が用いられていない、という傾向がある。その二語は、現代語に置きかえると、つらい気持を含んでいる点で、やや紛れがちになる。しかしもともとの古語としては、対照的なまでにその相違がきわだっている。「憂し」は、自分のせいでつらい気持であり、つらい、情ない、ぐらいの意となる。ほかならぬ自分のせいで、というのであるから、そうならざるをえない自分自身の運命を思いがちで、「宿世」などの語と結びつくことが多い。これに対して「つらし」は、こちらのつらいのは他者（相手）のせいだとして恨だ気持であり、恨めしい、ぐらいの意となる。これは、他者にしてやられたという被害者的な意識である。

その人生を源氏とともに歩むような藤壺の宮・六条御息所・紫の上・明石の君など、物語の主要な女君たちは前記したように、その関係をもっぱら「憂し」と思うけれども、「つらし」とは思わない。その女君たは、心に不満をいだいてつらいと思う場合も、源氏を単純に恨んだり憎んだりすることよりも、源氏と関わらざるをえない自分の運命をまじまじと凝視するということである。それだけ、源氏との抜きがたく深い関係を生かされていると自覚している。

また彼女たちは、当時の貴族社会という観点からも、この物語の世界という観点からも、いずれも高貴な存在の人としてみられている。その高貴な女君にふさわしい人柄や生き方として、他者から評さることはもちろん、自らも貴人らしく優雅なたしなみを持ちつづけるべきだと心がけている。ちなみに、このことは逆の用例からも証すことができる。藤壺の死後、源氏が紫の上を相手に生前の彼女を話題にしたことについて、源氏の夢に現れた藤壺が「（源氏のせいで）苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」（朝顔・四九五頁）と恨んでみせた。現世ではけっして「つらし」と言わなかったのに、霊界の存在となった彼女も、現世の規矩から自由になったところで、はじめて「つらし」と発することになったということである。したがって、現世に生かされている女君たちは、源氏から十分に顧みられない折があるとしても、口ぎたないまでに恨みなど思い言うべきでないとも思っているはずである。こうした貴人としての心くばりからも、「つらし」ではなく、「憂し」の語が選ばれることになろう。

このことも、藤壺の例に即して考えてみよう。まずは、この物語にとってきわめて重要な密会の場面の一節である。

(1)宮（藤壺）もあさましかりしと思し出づるだに、世とともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、いと心憂くて、……　（若紫・二三一頁）

「あさましかりし」とは、かつてはじめて源氏と通じてしまった過往の密通の事実。その一つの事実でさえ生涯の苦悩の種になっているのだから、せめてあれだけでやめにしてしまおう、と深く反省しているのに、またしてもこうなるとは、と思うところから、「心憂く」情なくわが身を顧みている。源氏との関係を、避けがたい運命のつらさだとするのである。

この密会からしばらく経ってからのことである。自ら体調の変化に気づいての、彼女の心情に即した叙述である。

(2)まことに御心地例のやうにもおはしまさぬはいかなるにかと、人知れず思すこともあれば、心憂く、いかならむとのみ思し乱る。暑きほどはいとど起きも上がりたまはず。三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人々見たてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど心憂し。（若紫・二三二頁）

神話にいう一夜孕みのように、一夜の逢瀬がもとで彼女は源氏の子を宿すことになった。身体の変調に気づいた彼女は、「心憂く」と思い、さらに懐妊三か月の微候が明らかになると、「あさましき御宿世のほど心憂し」と思う。「心憂し」の語が、「宿世」の語と密接に結びついている点に注意される。彼女はあらためて源氏との関係を、避けがたい運命の恐ろしさとして受けとめるほかない。

藤壷が源氏と密通して子をもうけ、しかもその子を桐壷帝の皇子として隠しおおせていくというのであるから、これは世間尋常ならざる人生である。物語の虚構なればこその、ものめずらしい人生である。源氏と深く共感をいだく女君たちは、この藤壷の宮に限らず、そのような並々ならぬわが人生を、自分の意思などを超えた巨大な運命に動かされている宿世だとして、思うようになる。そして彼女たちはしばしば、その人生を「憂し」「心憂し」ととらえては、内省を深めていく。この同一の語がそのように物語に貫いているというのは、この物語が、光源氏と女君たちとの類稀な人間関係の数々を構造的に束ねているからである。そこに、この虚構の物語に固有なしくみが構えられている。

また、このように己が宿世に痛恨する女君たちは当然ながら、危機的な状況に遭遇させられることにもなる。そうした状況に置かれた彼女たちは同じように、「人笑へ（人笑はれ）」の語によって、避けがたい危機感を強めるようになる。「人笑へ」は、世間の物笑い、ぐらいの意であるが、彼女たちは一様に、その言葉に、社会的生命を失うという重々しい危惧の気持をこめている。そして、その危機意識を強化するところから、逆にそれを回避して現況から脱却すべく、彼女たちはそれぞれ自分なりに、新しい具体的な生き方を拓いていこうとする。[3] ここでも、その同一の

「人笑へ」の語によって、女君たちそれぞれの存在が構造的に束ねられている。

そのことを、藤壷の宮の一例でおさえておこう。彼女は、弘徽殿の右大臣家の専制的な状況のなかで源氏とともに孤立するほかなくなるが、しかもその唯一の頼みとする源氏さえも従前にもまして危うい懸想をしかけてくる。困惑する彼女は、亡き桐壷院の遺言を思い起こしながら、一つの決意にいたる。

(a)大后（弘徽殿）のあるまじきことにのたまふなる位をも去りなん、とやうやう思しなる。院の思しのたまはせしさまのなのめならざりしを思し出づるにも、よろづのこと、ありしにもあらず変りゆく世にこそあめれ、戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人笑へなることはありぬべき身にこそあめれ、など世の疎ましく過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思しとるに、……（賢木・一一四頁）

このままでは「人笑へ」が必定だと危惧するところから、逆に「背なむ」の出家という新しい生き方が引き出されたというのである。そのことによって彼女は、源氏と懸想抜きの親交を保ちながら、しかも自らを源氏や東宮（源氏との不義の子）とともに、将来への期待をとりこむことのできる道を模索したことになる。

他の女君たちの場合をもみておこう。六条御息所は、その自尊心の強さも手伝って、源氏との醜聞が世間に知られたことに、いよいよ堪えがたい思いであった。幼い娘が斎宮に任ぜられたのを機に、自らも伊勢に下向するか否かを、その源氏との風評を根拠に考えようとする。

(b)今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。さりとて立ちとなるべく思しなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず、……（葵・三十頁）

源氏との仲を清算して下向するのも心細くもあり、またいかにも源氏に捨てられたと思うのも癪だ、かといって都にとどまるべきかを思い返すと、世間からの侮辱にさらされるわが身が堪えがたい、というのである。屈曲する心情の根拠が「人笑へ」であり、下向の決意を導く根拠もまた「人笑へ」であった。

また、源氏との身分違いに悩む明石の君は、幼い姫君を養うことだけを生きる支えとしていた。しかし、この姫君を将来の后にと目論む源氏から、その姫君を紫の上の養女として手放すことを勧められる。当然ながら彼女は愛娘を手放したくはないが、次のように「人笑へ」を根拠に、ついに手放すことを決心していまう。

(c)立ちまじりてもいかに人笑へにや、……

（薄雲・四三一頁）

姫君が将来、源氏の周辺に出入りする場合、素性のいやしさを取り沙汰されて、どんなに「人笑へ」になるだろうか、と危惧するところから、逆にその決意が導かれたのである。

最後は紫の上の例である。彼女は晩年に入ろうとするところで、予想もしなかった女三の宮の六条院への降嫁という事態に遭遇し、それまでの六条院の女主人としての存在が危ぶまれるようになる。

(d)今はさりともとのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。

（若菜上・五四頁）

これまで源氏との夫婦仲に安心しきっていた彼女は、今や世間の物笑いにさらされるのではないか、と恐れている。それを「人笑へ」として、最悪の事態を危ぶむところから、逆に苦衷を心の内に封じこめて、平気を装う処世態度を持することになる。それが、彼女の引き出した新しい生き方であった。彼女は源氏に協力して彼を女三の宮の閨へと送りこむなど、苦衷をおしこめて平静を装う。そうした処世態度によって、自分に対する第三者のとかくの物言いを封じこめられると考え、他者の同情をさえ避け通すことになる。紫の上はこの日を境に、人は人、処世の態度は態度と、二つを峻別して生きる人生に転ずるのである。

右にみてきた「憂し」「人笑へ」の語は、源氏と深く関わっている女君たちの、その存在をきわやかに特徴づける言葉になっている。それは、源氏と女君たちを独自に関係づけるための文体となって、長編物語の虚構の要となっている。ここでの同一の語の特徴的な用い方は、この女君たちを源氏の主要な存在として束ねながら、しかもその一人一人の個別性をきわだてることにもなっているのである。

注

(1) 小稿に引用する『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。頁数もそれによる。

(2) このあたりの論旨は、拙著『源氏物語虚構論』（東京大学出版会）第六編第三章「柏木の物語と光源氏」と重なっている。

(3) このあたりの論旨も、前掲拙著第一編第二章「物語の人物造型」と重なっている。

〔付記〕小論は、昨年度の公開講演をもとにしているが、論旨を簡潔にするために、題目を多少変更させていただいた。